

ヨーロッパの核のハイヌーン

スコット・リッター（元国連のイラク調査責任者、現在ウクライナ戦争を分析し発信している）著、脇浜義明訳

出典：Consortium News, 2022年10月20日

バイデンは今こそ米国の核ドクトリンを明確にすべき時だ。しかし彼は沈黙したままだ。

10月17日、NATOは「確固たる正午」作戦（Operation STEADFAST NOON）という核戦争演習を開始した。これは毎年行う軍事演習である。ヨーロッパだけが NATO の核の傘の下に入るので、「確固たる正午」はロシアを核攻撃する NATO 演習であるのは議論の余地がない。それをしっかり頭に入れて欲しい。

NATO スポークスパーソンのオアナ・ルングeskは、「確固たる正午」の目的は NATO の核戦争に対応する力が「確実に効果的」であることを確認するために行うだけの、「通例の」演習で、現在の出来事とは無関係だ、と世界に説明した。それに、「本物」の核兵器ではなく「模擬核兵器」を使うだけだから、心配しないでよいと言った。

この核兵器劇場の舞台の右手に登場したのがイェンス・ストルテンベルグ NATO 事務総長。10月11日の新聞発表で、「ウクライナ戦争でロシアが勝つようなことになれば NATO の敗北になる」と語り、それから無気味な口調で「そんなことに許すことはできない」と付け加えた。そして、最後に、その目的に向かって「確固たる正午」核戦争演習を予定通り行う、この演習はロシアの「目に消えない核の脅威」に対する重要な抑止力となると、語った。

それなのに、演習が現在の出来事と無関係だと言えるのか？

核兵器劇場舞台の左手に登場したのはウクライナ大統領ウオロディミル・ゼレンスキー。彼はオーストラリアの独立系シンクタンクのローウィ研究所で講演、ロシアがウクライナに対して核兵器を使う可能性を阻止するためにロシアに対して「予防措置として先制攻撃」することを国際社会に要望した。観測筋の多くはゼレンスキーの演説が NATO にロシアへの先制核攻撃を要請したものと解釈したので、ゼレンスキーの補佐官たちは慌てて発言記録を修正し、大統領は単に対ロシア制裁の強化を要求しただけだと解説した。

核兵器劇場舞台の中央に登場したのはジョー・バイデン。10月6日にウクライナ戦争の資金を集めるパーティで演説し、「このまま事態が続けば、キューバ・ミサイル危機以後初めて核兵器使用の直接的脅威に直面している」と語った。さらに彼は続けて、「私はプーチンの性格をかなりよく知っている。ロシア軍の働きはあまりよくないので、彼が戦術核兵器か又は生物兵器や化学兵器を使用する可能性を口にしたとき、彼は本気であった」と言った。そして、「戦術核を安易に使って、その結果アルマゲドンを招かないということはありません」と締めくくった。

バイデン演説は個人的思いの吐露であって、ロシアの核戦略に関する正確な情報に基づく発言ではないと、ホワイトハウスが必死になって弁明したが、現職大統領が核の「アルマゲドン」が起り得ることを語ったことが世界の戦争狂気に病んでいない人々の背筋を寒くした事実は消せない。

ロシア政府は戦術的核兵使用を語っていない

何よりもまず、ロシア政府が戦術核兵器の使用を口にしたことはまったくない。プーチン大統領が言ったのは、ロシアを防衛するためには「使用可能なあらゆる手段」を使う、であった。一番最近にそれを言ったのは9月21日、軍を部分的に動員することをテレビ発表したときであった。そのとき彼は西側が「核攻撃脅迫」をかけていると非難し、「NATOの主要諸国の高官がロシアに対して大量破壊する核兵器を使う可能性を発言している」実例を例示した。

プーチンは、英国首相になる前のリズ・トラスが、首相になったら英国の核戦力の使用命令を出す責任を担えるかという質問に対して、「それは首相の重要な義務で、私はそうする用意がある」と答えたことを例示して、「わが国にも様々な大量破壊兵器があり、それもNATO諸国の兵器よりも近代的なものもあることを、忘れないでもらいたい。もしわが国の領土保全が脅かされたら、我々はロシアと国民を守るために、使用可能なあらゆる手段を使うだろう」と言った。

プーチン発言はセルゲイ・ショイグ国防相の発言と合致している。国防相は、8月16日に開かれた第10回国際安全保障モスクワ会議の挨拶の中で、ロシアはウクライナで核兵器を使用しないと述べたのだ。彼は、ロシアの核兵器はロシア・ドクトリンに規定されるように「異例な事態」にのみ使用が認可されており、ウクライナ状況はそれにあたらないと説明した。ロシアがウクライナを核爆弾攻撃するという噂は「馬鹿げている」と言った。

バイデンはそう思っていないのは明らかだ。彼はプーチンの性格をかなりよく知っていると行ってプーチンの核使用の可能性を語ったが、大間違いである。ロシアがウクライナ戦争で核の先制攻撃を行う危険があるというより、むしろ危険は米国がそれを行う可能性があることだ。

バイデンの「唯一の目的政策」

2021年2月政権の座に就いたバイデンは、米国の核政策を従来の「柔軟な抑止」政策から「唯一の目的政策」(sole purpose policy)への移行を公約した。「わが国の核兵器の唯一の目的は他国から核攻撃を抑止 — そして、必要な場合は、反撃 — することである」。

現在は2022年10月半ば、米国はバイデン自身が核「アルマゲドン」が起きる可能性があると言った状況の中にある。バイデンが公約を履行するとしたら、今がその時である。しかし、彼は沈黙している。

バイデンの沈黙に内在する危険は、ロシアの安全保障に心配するプーチンや政府高官たちは米国が公言している米国核兵器ドクトリンに依存するしかないことである。米国の核ドクトリンはジョージ W. ブッシュ大統領政権のときに公布した先制核攻撃政策である。それによれば、核兵器は軍の武器庫にある兵器の一つにすぎず、必要に応じて使う武器の一つという扱いなのだ。だから、作戦上有利な状況を得るという単純な戦略目的のために大量破壊兵器を使うこともあり得るのだ。

通常兵器による激しい先制攻撃が相手側に対する抑止力になる場合がある。敵に米国が何をするか分からないという恐怖心を抱かせる「狂人理論」である。

ベトナム戦争当時リチャード・ニクソン大統領が「狂人理論 (Madman Theory) と呼ぶことにする」とボブ・ハルデマン補佐官に語ったという報道がある。「北ベトナムに私が何をするか分からないほど頭にきていっていると思わせるのだ。ニクソンが共産主義をやたらに気にして、何をしでかすか分からない状態になっていると、彼らに思わせるのだ。ニクソンは核兵器のボタンを常に持っているので、これ以上ニクソンを刺激しないようにしようと思わせるのだ。そうなりや、2日もすればホー・チ・ミンは和平を求めてパリへ飛んでくるだろう」と言ったといわれる。

狂人理論

ニクソンの狂人理論に新しい息を吹き込んだのはドナルド・トランプであった。彼は北朝鮮に対し、米国を脅し続けると「火と怒りと世界が経験したことがないような大きな破壊に見舞われることになるぞ」と言った。それから彼は北朝鮮指導者金正恩を3回も対面交渉を行い、朝鮮半島の非核化を試みたが、失敗した。

トランプ政権下で米海軍はトライデント潜水艦の弾道ミサイルに新しく W-76-2 低威力核弾頭を配備した。これで核兵器を使用するとき大統領は広い選択幅を得た。当時国務次官 (政策担当) だったジョン・ルーは「この補足的力は米国の抑止力を強化し、米国に即座に発射でき、大量死者を出さない低威力戦略武器を実用的に利用できるようになり、わが国の抑止力拡大を促進し、潜在的敵国に、米国がどんな脅威シナリオにも確実にしっかり対応できるので、限定的核爆弾使用戦術を採っても無駄であることを認識させるであろう」と言った。

そういうロシアからの脅威シナリオがあるという想定、つまりバルト海地域の偶発事件が起きたという想定で W-76-2 低威力断頭を使う (実際ではなく想定理論的に) 演習が行われた。米軍の W-76-2 核弾頭使用の指導でロシアを引きさがらせる、つまり大々的核戦争 — アルマゲドン — になるような核使用をさせなくする演習であった。

そういう時代背景は現在に繋がっている。このエッセイを書いているとき、米国の核爆弾搭載爆撃機 B-52 が米本土基地からヨーロッパで飛んで、ロシアを核攻撃の標的にした演習を行う。他にオランダのフォルケル航空基地 (そこには米の核爆弾搭載機 B-61 の集結している) からも多くの爆撃機が参加し、ロシアを標的にした NATO 核兵器使用の訓練をする。

この NATO の対ロシア核攻撃の演習に対しロシアも例年の核兵器演習「グロム」(雷音)を行った。これはミサイル発射などロシアの戦略核兵器も移動させる大規模演習であった。このロシアの演習に対し米国の防衛関係の高官は、匿名条件で、「ウクライナと戦争をやっているときにロシアが核兵器を語りその演習をするとは無責任きわまる。核兵器を誇示して米国とその同盟国を威嚇するのはいいかげんな行為である」と語ったが、まさに偽善の極みといえる。

1962年10月22日、ちょうど60年前の今日にあたるが、ジョン・ケネディは有名な18分間テレビ演説で、米国がミサイル攻撃を受ける「紛れもない証拠」を国民に告げた。そしてキューバに向かうミサイルを積んだソ連の船団を武力で阻止する意向を明らかにし、ソ連に引き返すことを要求した。同時に、駐ソ連米大使フォイ・コーラーはケネディのフルシチョフ宛親書を渡した。その手紙は、

私が一番心配しているのは、いかなる事態にも米国が対処する意志と決意があることを貴政府が理解していない可能性があることです。この核時代にあつて貴殿や正常な意識のある人間が、どちらの国も勝者なれずただ世界全体に途方もなく巨大な破壊をもたらすだけの核戦争に、意識的に踏み込もうとすることはないだろうと、私は思っていたのです。

ジョー・バイデンはこの手紙とその後の経過をしっかりと思い出し、あの時の米国の位置が現在のロシアの位置であることを理解すべきである。核兵器を持つ NATO に囲まれたロシアの世界観を理解すべきである。

今は芝居がかった煽情的言葉を放つときではない。今は正気と成熟と自制を發揮すべきときである。ウクライナの大統領がロシアに対して先制核攻撃をせよと声高に叫んだ僅か一週後に、ロシアを核攻撃する「確固たる正午」 NATO 演習をすれば、ロシアが「誤解」するかもしれないことは、正常な神経のある人間ならば分かりそうなものである。正常な神経の指導者なら演習の時期をずらし、ロシアに同じような核兵器演習をしないようにさせるはずである。

しかし、米国はそうしない。そして、核爆弾絶滅恐怖を資金集めマントラに使うほどナルシストなエゴの塊の人物から、核アルマゲドンを台本もなくぶっつけ本番的に扱うという言及を受けることになる。

ちょっとした誤解、些細な思い違いや計算ミスで、「確固たる午後」が「ハイヌーン」に、「グロム」が「モルニヤ」(落雷)になる。このシナリオは過去に経験した。1983年11月 NATO は「エイブル・アーチャー83」というコードネームの指揮所演習を行い「核兵器発射指揮系統」をテストしたときのことだ。この演習にソ連が驚き、それが演習に名を借りた NATO によるソ連核攻撃だと誤解し、核弾頭を爆撃機に積み込んで反撃の用意をして NATO とソ連の核戦争の瀬戸際になったことがある。

後にソ連が米国の先制核攻撃と勘違いしたという情報報告を受けとったレーガン大統領は次のようにコメントした。

米国には核攻撃に対応する多くの緊急対策があった。しかし、攻撃という異常事態は急速に起きるので、理性的判断や事前の計画がそのときにどれだけ機能するかは分からない・・・レーダー画面に映った点を何かを見極め核アルマゲドンを発射するかどうかを6分以内に決定しなければならない。そんな時に誰が理性的判断ができるだろうか？

この認識を得たタカ派大統領の姿勢に変化が起きた。それまではソ連を「悪の帝国」と呼び、ソ連への核ミサイル発射をゲーム感覚で冗談にした大統領が、核兵器に対して慎重な姿勢となったのだ。

「エイブル・アーチャー83」から4年後、レーガンはソ連のミハイル・ゴルバチョフと会談し、中距離核戦力全廃条約（訳注：2019年に米国はこの条約の破棄をロシアに通告、ロシアも条約履行義務の停止を宣言した）に調印した。この条約は米国とソ連の武器庫から全種類の核兵器を排除するという、軍備管理史上初めてで画期的なものであった。

現在の核危機への対応としてこれと同じような軍縮が近い将来に実現すればよいのだが・・・